ナローボート巡航記（運河の旅）Ｎｏ．５　（14/Sept/2007）

クルーズ三日目（２００６年９月４日・月曜日）

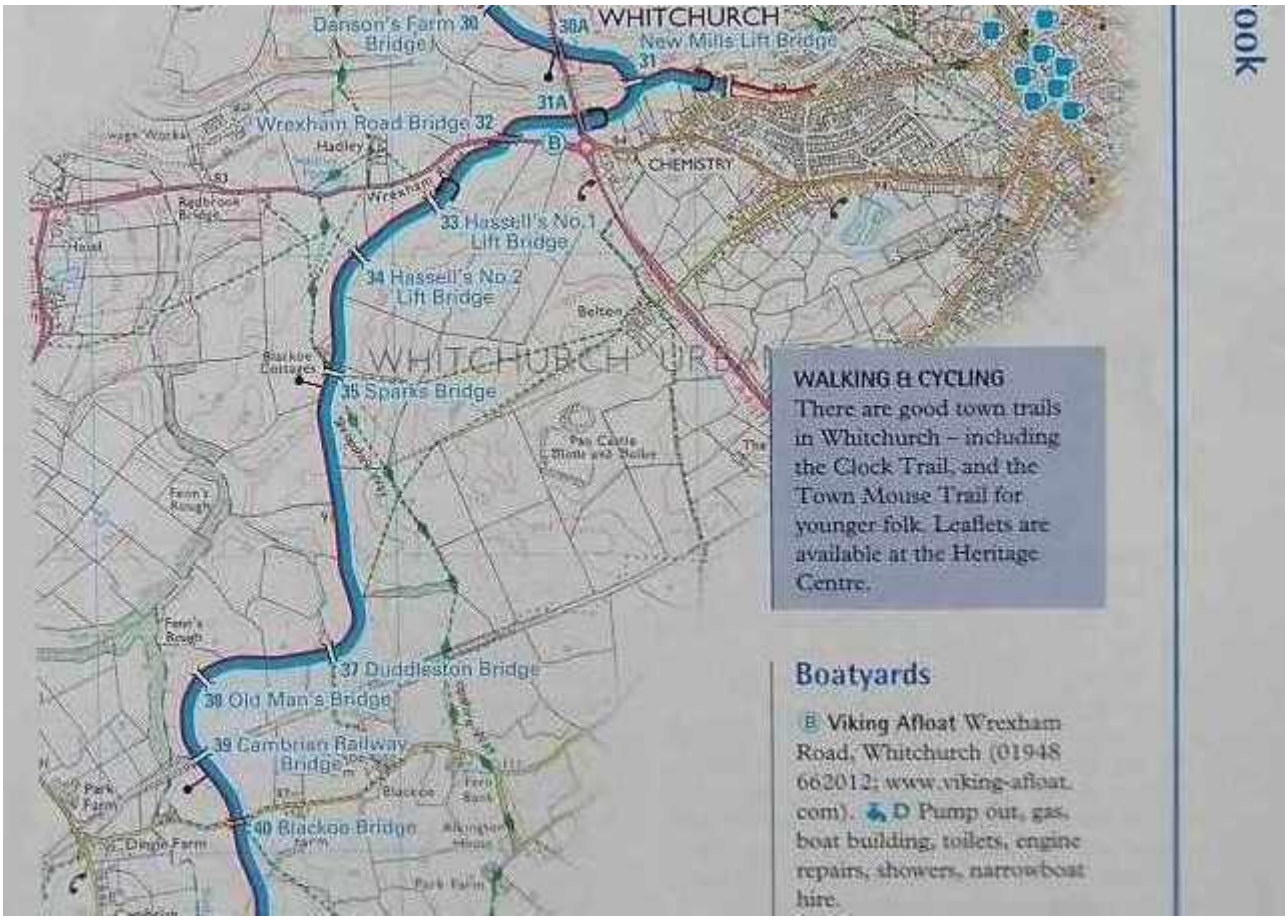
昨日は Whitchurch の見物をしそこなったので、その代り今日は往路には通過してしまった Ellesmere の町に寄ってみることにしました。

本来なら昨夜は Whitchurch のパブで呑んでいたはずなのに、二晩連続の船内酒盛りになってしまい、ワインやビールの在庫がやや心細くなったので、その補給が必要になっていたからでもあります。　こういう大事な水物の買い出しは、こまめにやらないと徒歩の手持ちでは到底運べなくなることを、四年間のスペイン暮らしでイヤというほど身に沁みています。

Whitchurch から Ellesmere 迄の水路は下の５枚の地図の通りです。　地図を見るのが嫌いな方、面倒な方は飛ばして下さい。

順路は各地図の上(北)から下(南)へ、右(東)から左(西)へ、です。

大雑把に言って Ellesmere の町は Whitchurch の南西方になります。 運河のところどころに黒い虫ピン・マークがありますが、これはマイル・ポスト即ち虫ピンから虫ピンまでが１マイル(land-mile)＝１６０９ｍということです。



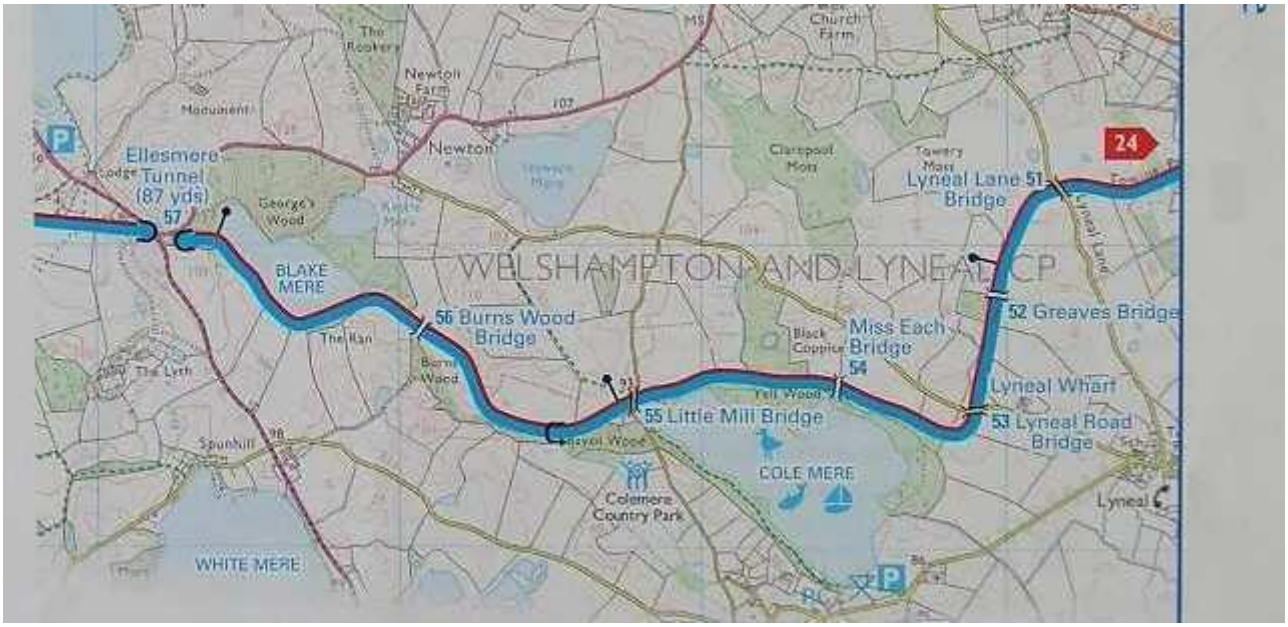
ナンバーのついた二の字が沢山運河をまたいでますが、勿論これは橋。でも橋に続く道路がない所があちこちにありますね。そういうのは運河が牧草地を分断してしまったために農業者や家畜が運河の両側に行き来するための橋なんです。羊や牛が橋の上から運河を通るボートを見下ろしているなんて愉快でしょう？

トウ・パス(Tow path＝馬道)は、現在では大抵運河の片側だけにあるようです。地図上で運河の片側に濃い線が描かれていますがこれがトウ・パスです。良く見るとこれが運河の右側に行ったり左側に行ったりしているのが分かります。実際にこれを使ってボートを馬にひかせた頃も片側だったのかどうか？　両側にあった方が便利だと思いますが、少なくとも私たちは両側にトウ・パスがあるという所を見た記憶がありません。逆に全然ない所はよく見ます。

上の２枚目と下の３枚目の地図で、運河がほとんど直線的に走っている所がありますね。これは多分運河掘削当時は畑も何もない原野で、しかも全然起伏のない

場所だった、要するに、土地の買収とか、丘を迂回するとか何も考慮する必要はなく、安心してただもう真っ直ぐに掘れた所だったんだと思います。

そうではなく、くねくねと曲がっている所は平地とは言え多少の起伏があり、なるべく掘りやすい経路を選択した結果でしょう。



この町に近づく頃から湖水というか池というか大小さまざまな水面が運河の両側の木立の隙間に見え隠れしていました。衛星写真で見るとこのような地形です。

黒い部分、灰色の部分が水面です。

運河は右下の湖水の北側、左上の池の南側を走ってますが見分けられますか？

上の写真の場所は一つ上の４枚目の地図の中央部分です。右下の湖が地図上で Cole Mere と言っているもの、左上は Blake Mere、左下は White Mere です。地図と見比べると、写真でも運河の位置が大体分かりますね。特に二つの湖水、Cole Mere と Blake Mere の間は、はっきりしてるでしょう？。

水を渡り、また水を渡る、なんて文句が頭の片隅をよぎります。

Ellesmere の町は下の５枚目の右上部分。やはり運河が盲腸線になっている部分の奥にあります。Ellesmere の mere は湖水とか池という意味の古語だそうで、このあたりには ○○mere という名前の湖水や集落がたくさんあります。

この町の名もその一つです。

Junction the Montgomery Canal branches south towards Newtown: it is currently navigable to Gronwyn Wharf, just beyond Maesbry Marsh, and further restoration continues.
ELLESMERE
THE MERE
58 Red Bridge
White Bridge 59
BW Ellesmere Yard
Pipe Bridge
60 Stanks Bridge
61 White Mill Bridge
Coachman's Bridge 62
63 Clay Pit Bridge
TETCHILL
64 Val Hill No 1 Bridge
65 Val Hill No 2 Bridge
66 Val Hill No 3 Bridge
Broom Bridge 67
68 Pryce's Bridge
Peters Bridge 69
Rowsons Bridge 70
2 Nicholas Bridge
Frankton Junction
LOWER FRANKTON
29
Boatyards
Blackwater Meadow Marina Birch Road, Ellesmere Road (01691 624391).
Pump out, gas, day-boat hire, overnight and long-term mooring, slipway, chandlery, boat and engine sales and repairs, books, maps, and gifts.
Lyneal Wharf (01588 638234). Provide canal-based holidays for the disabled.

Ellesmere の盲腸線の一番奥の行きどまりは、ターニング・ベイスン（回頭スペース）になっていて、その周りは舗装された停泊地になっています。写真中央のお好み焼きのヘラのような形のところ。

こういうところでは、ボートをつなぐためのボラード（Bollard＝係船柱）や鉄製のリングがあるのでボートについている係留ロープをそれに止めるだけでいいんですが、運河の岸でそういった設備が何もないところではどうやって船を繋いだらいいのか？　それにはボートの備品として積んである通称コルク・スクリューと呼ばれる用具を使います。

これは呼び名の通りワインのコルク栓を抜く道具、コルク・スクリューと同じ形の大きなものです。　大人の指ほどの太さの螺旋の鉄棒、全長６～７０センチで頭部にＴの字型のハンドルとロープを通すリングが付いていています。

これを運河の岸の泥の地面にねじ込むのです。４～５０センチもねじ込めば十分でしょう。　ボートの前後に一本ずつこれをねじ込んで、ボートの舫い綱をそのリングにとめるんです。

まあ、そんな作業はしなくても、集落に近い所ではトウ・パス側の岸に係船のためのリングを取り付けてあるところが結構あります。

また、トウ・パスの向こう側に木立があって適当な枝ぶりの木があっても、これにロープを繋ぐことは禁じられています。ロープがトウ・パスを横切ることになり、トウ・パスを歩く人の迷惑になるからです。

Ellesmere では、そのターニング・ベイスンにボートを舫って、買い物上陸。街そのものは小さく、特に見物するような所もありませんでした。

一渡り散歩をしたあと、食糧や絵葉書・切手など、それにサンドウィッチとビールも買いこんでボートに戻り遅い昼食。

ここへ来るまでの途中は平らで、ほとんど変化のない田園風景が続きますが、それでも少しくらいは風景も変わります。

こんな風に木立に囲まれたり・・・。

小奇麗な水辺の農家のわきを通ったり・・・。

ラベンダーよりちょっと色が薄い、何の花か満開の花の絨毯があったり・・・。

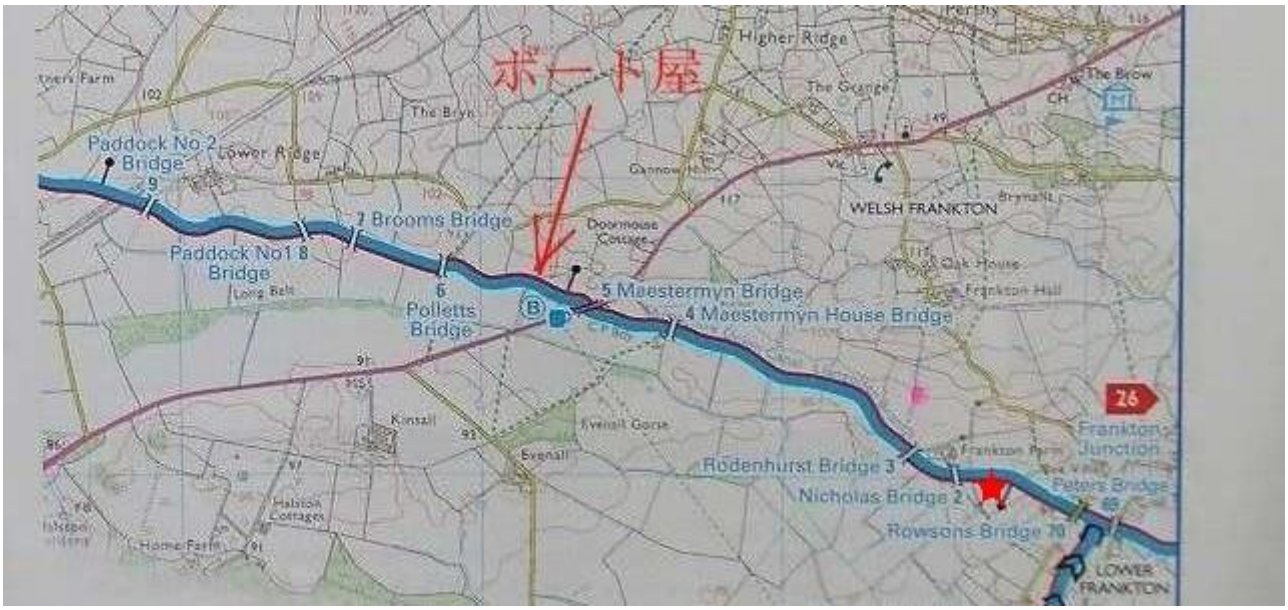
前方にほかのボートが走っていないとこんな水鏡になっていたり・・・。

さて、ボート上でサンドウィッチ＆ビールの昼食の後、また西に向けて出発。ちなみに、イギリス旅行中何か軽い昼食を、と思ったら、私たちは躊躇なくサンドウィッチ＆ビールにします。これがまず一番間違いがない、ハラが立たない。それ以外は？　ウーン、この際意見ナシとしておきます。

Ellesmere の町から西へ約７キロ走ると出発点のボート・ヤードです。

ここで水の補給とポンプ・アウトをしてもらってさらに西へ２キロほど走り、Hindford という集落のパブの前で停泊の予定。 今夜こそ、そこのパブで晩酌、そして夕食、という魂胆です。

ところでポンプ・アウトとはトイレのタンクをポンプで吸い出すこと。要するに「汲み取り」です。　でもトイレ自体はポットンではなくちゃんと水洗ですよ。それをそのまま運河に放出することはできないのでタンクに貯めておくんです。だから、満タンになる前に、運河の所々に設置されているポンプ・アウト・ステイションに寄って自分でポンプを操作して吸い出すんですが、ボート・ヤードに行けばサービスでやってくれるから楽です。　まあ、一週間程度ならその心配もないんだけど、通るついでにやっといてもらえばもっと安心だから・・・。



上は初日の出発点のボート・ヤード付近、Hindford は左端の欄外のすぐ先。地図では集落のように書いてありましたが、ボートを舫って上陸してみると、何のことはないここにはパブしかないんですね。

パブと言ってもただの呑み屋のようなものから、レストランあり宿泊施設ありという大がかりなものまで色々で、ここのは後者に属するものでした。しかも、宿泊棟、レストラン棟、それにいわゆるパブ棟、そのほかにオーナーの家や従業員宿泊棟らしいのまであって、敷地の広さも大したものです。これなら地図の上では小さな集落のようになっているのも納得。

ところが、どこもここもひっそりしていて人気がありません。あちこち探し回った挙句、レストランの調理場でなにやら洗い物をしていたコック見習い風に店は何時に開くのか聞いたんですがさっぱり要領を得ません。ワシャ知らんという感じ。まあ、まだ日も暮れないうちから晩酌・夕食を求めてうろつく方が悪いか、と、とりあえずは撤退、ボートに帰って下地を入れていました。

そして、薄暗くなったころを見計らってまた出かけました。今度はパブ棟にも明かりがついて、中に入ると人がいっぱい、座るところも全部ふさがって半分は立ち呑み。で、食事は何時から？と聞くと、これまた、さあ、何時かな？と埒が明きません。店内いっぱいの客もみな食事の用意ができるのを待っているらしい。いったいこんな大勢の客がどこから来るのか？　あたり一面の農地でここより外に人家らしいものは視界内にはないんですよ。よっぽど夜の娯楽が少ない土地なんですねー。ここは近郷近在の社交クラブか？

それにしても、イギリスのこういう店は概して愛想がないですねー。ウェールズとかイングランドとかの問題じゃないと思います、どうも押し並べてヨソ者に対して愛嬌がない。と思うのはこっちの偏見か？　特にこんな田舎の、地元の常連だけがたむろするような所でそう感じます。
もっとも、日本に来た外国人もそう感じるかもしれない、島国日本もあまりヨソ者に愛想良い方ではないから・・・。両者とも愛想がないというより、シャイなのだと言うべきかもしれない。島国の人間はシャイだ、と言ったのはほかならぬイギリス人、キャプテン・クックでしたけどね。

そこへいくとスペインなんか、どんなド田舎の、日本人なんか見たこともない、なんて土地でも、私達がそっけなく遇されたことはなかった。店の人間だけでなく常連客も皆一様に珍しい遠来の客を気持ち良く迎えてくれたなー。
だからこそ私たちは四年間何の不安もなく楽しく過ごせたと言えるでしょう。

今、私たちは長崎に移り住んで、スペイン同様温かく受け入れられていると思っています。長崎という土地も、日本では最も人情の温かい所の一つと言って間違いない、と、住み着いてそろそろ一年の確信です。

とにかく、こりゃとても待っちゃおれん、とまたまた撤収。　結局、船に戻って三夜連続の船内酒盛りとなってしまいました。われながら、日本人は待てない人種だなー、と思います。では、この続きはまた今度・・・。

＊＊＊